



真宗新書

現在いまを生きる
仏教入門

古田和弘

Furuta Kazuhiro

現い在まを生きる 仏教入門

もくじ

序章 現代と仏教…………… 7

いま、なぜ仏教なのか?…………… 8

第1章 釈尊…………… 15

お釈迦さまはどういう人だったのか?…………… 16

お釈迦さまが説かれた法・経典…………… 23

第2章 釈尊の教説…………… 31

すべては縁起によって成り立つという教え…………… 32

縁起説の展開…………… 40

真理を知らせる四諦の教え…………… 53

涅槃に至るための二学 of 教え…………… 61

第3章 大乘の教え…………… 69

自利利他円満…………… 70

菩薩道…………… 77

空の観察…………… 84

大乘のお経…………… 91

第4章 釈尊の教えの継承…………… 99

龍樹菩薩…………… 100

天親菩薩…………… 114

第5章 中国の仏教…………… 129

受容と定着…………… 130

発展と衰退…………… 138

第6章 浄土の教え……………145

曇鸞大師……………146

道綽禪師……………153

善導大師……………160

源信僧都……………167

源空上人(法然上人)……………175

第7章 仏教の真の宗……………183

親鸞聖人……………184

あとがき……………192

序章 現代と仏教

いま、なぜ仏教なのか？

仏教は気休めにすぎない？

いま、仏教はどのようなものとして見られているでしょうか。その見方はさまざまにあると思います。

まったく無関心、つまり自分の日常生活とは関係ないと見る見方もあるでしょう。

あるいは、急速に進展する社会情勢とは相容れないものと見られる場合もあると思います。「時代遅れの無益なもの」という見方です。

さらに、観光の対象として、または著名な寺院での諸行事などには関心があるとする見方もあるでしょう。つまり多忙な日常のしがらみから、しばし離れる

「鑑賞の世界」にかかわるものとして、仏教が見られているわけです。

また、自分の家系が昔から仏教の宗派の一つにかかわりがあるので、ご葬儀やご法事などの際に思い起こす程度という方もおられるでしょう。消極的な関係でしかないという受け止め方です。

仏教は、これまでの因習から抜け出せないでおられる高齢者の方々の気休めに過ぎないという見方もあるでしょう。

あるいは、仏教は、日本を含めた東アジアの諸地域に古くから伝承されてきたもので、いまでも人びとの日常の風俗習慣や生活感覚に何がしかの影響を与えていると受け取られていることもあると思います。

なかには、仏教が、自分および周辺の人びとの日々の暮らしを支えている信条になっていると受け取られる場合もあるかと思えます。

そしてこれらとは違ったかかわり方も、いろいろとあることでしょう。

このように、さまざまな見方、とらえ方があるわけですが、では本当は仏教とは何なのでしょうか。

私たちを取り巻く現実

私たちはいま、どのような世の中に暮らしているのでしょうか。

日ごろは、何気なくやりすごしているけれども、何かの機会にふと思い返してみると、私たちの生活環境が急速に大きく変貌へんぼうしていることに気づかされます。

ひと昔前に比べると、いまは比較にならないほど、豊かな社会になっています。この豊かさを獲得するために、人びとは、嘗々えいせいと努力を積み重ねてきたのです。

また、昔に比べると、比較にならないほど便利な世の中になっています。いままで想像もできなかったことが、当然のことのように実現しているのです。この

ように、利便性が日常化しているのもまた、人びとの懸命な営為の結果なのです。

私たちは、そのような豊かさや便利さの恩恵めぐみに浴よしています。しかもそれを当然のことのように享受きょうじゆしているのです。

しかし、時には疑問やためらいが生じます。これほどまでに贅沢ぜいたくをしいているのかなと、思うことがあります。人は、どれほどまで豊かになれば満足するのかなと、思うことすらあります。

また、便利さについても、はたしてこれほどまで必要なかという疑問が生じます。この先、どこまで進化し続けようとしているのかと、心配にもなります。

日々の暮らしの身近なところにも、気になる問題があらこちらに散見できます。現に、高度経済成長の影で、勝者と敗者の格差が深刻化しています。事柄そのものは、合理的で便利だけれども、それがしばしば、結果として不条理な困難

をもたらすことがあります。生き甲斐を感じて生きている人もおられますが、その一方で、社会に背を向けて、しらけきって生きている人もおられます。このようなことが何重にも積み重なっているのが、私たちが生きている社会の現実ではないでしょうか。

仏教が知らせようとしていること

仏教は、難解で深遠な教えであるという印象があります。たしかに、日常離れしているようで、わかりにくい面が多々あります。しかし、ひよつとすると、それは、私たちが常識だと思いついでいるその思いが、仏教をわざわざ難解なものと感じさせているのかもしれない。

仏教の基本は、極めて明快であると言つて良いと思います。人は、なぜ不満を懐くのか、なぜ不安を感じるのか、なぜ悩まなければならないのか、なぜ悲しま

なければならないのか、なぜ他人と争うのか、そのようなことを問うことから仏教は始まっているのです。

そして、どうすれば満足できるのか、どうすれば安心できるのか、どうすれば悩まなくてすむのか、どうすれば悲しまなくてすむのか、どうすれば争わなくてすむのか、そのことを知らせようとしている教えなのです。

仏教は、決して、神秘的な世界に人びとを誘導しようとしているものではありません。眼に見える代償を私たちに与えようとしているのでもありません。当然の道理を伝えようとしているのです。本来あるべき自分に気づかせようとしているのです。本当の満足と安心と歓びを知らせようとしているのです。

そのために、私たちの生き方を支配している常識に対して、厳しく訂正を求めているところもあるようです。私たちが思いついでいる日常に、どのような問題が潜んでいるのか、これが私だと思つている、その思いの中にどのような問題が

隠れているのか、それらについて、明快な指摘を与えるのが仏教なのでしょう。
その指摘のおおよそのところを確かめてゆきたいと思うのです。

第1章 積尊

お釈迦さまはどのような人だったのか？

「釈尊」という呼び方

仏教は、インドの「ゴータマ・シッタールタ」という人から始まりました。今から2千5百年ほど昔のことです。この人が覺りを得て仏になられましたので、人々は、この人のことを「シャーキヤ・ムニ・ブツダ」と尊称したのです。その呼び名が中国に伝えられ、「釈迦牟尼仏陀」と中国の文字に音写されたのです。

「釈迦」とは、北インドに栄えた民族の名。「牟尼」は「尊い人」。「仏陀」は「目覚めた人」ということです。

「釈迦牟尼仏陀」は、「釈迦族出身の尊い人で目覚めた人」というほどの意味になります。

私たちは、「釈迦」とか「お釈迦さま」とか、そういう言い方をよく耳にします。それは、正確な呼び名とは言えませんが、簡略化した言い方であり、また、独特の尊敬と親しみを込めた言い方ということになります。

「釈迦族出身の尊い人」ということから、多くは、「釈尊」とお呼びしているのです。

仏とは

「仏」は「ブツダ」の音写語である「仏陀」を省略したものです。「ブツダ」は「目覚めた人」ということですが、それは「道理に目覚めた人」「事実に目覚めた人」という意味です。

ここにいう「道理」とは、私たちの思いを越えた、物事の当然のすじみちのことです。

また、私たちは「事実」という言葉をよく使いますが、厳密に言えば、人は誰も「事実」は知らないのです。私たちは、物事に接する場合に、まったく透明な、澄み切った状態で物事に接することはできないのです。物事に接するに先立って、自分の思い、そのときどきの都合、蓄積してきた知識、場合によっては利害を温存しています。それらを温存したままで、物事に接しているのです。それは「事実」とは関係ないのです。それは自分の眼に写る事実、心に思う事実ですから、「現実」なのです。

「仏」は、そのような、人の思いを越えた「事実」に目覚められた人なのです。

釈尊の生涯

釈尊は、今から約2千5百年前の4月8日、北インドのカピラ・ヴァストウを都とした釈迦族の浄飯王（スッドーダナ王）と摩耶夫人（マーヤー）との間に誕

生されました。

摩耶夫人は、出産の日が近づいてきたので、実家に帰って出産するために故郷に向かわれました。しかし、道中のルンビニーという森の中で出産されたのです。出産後、夫人は体力を回復することなく、7日後に亡くなられたと伝えられています。

この出来事は、仏教の基本的な性質に深くかかわっていると思われれます。釈尊にしてみれば、ご自分の誕生とお母さんの死が、7日の差はあるにしても、一つの出来事だったのです。一人の命を世に送り出すほどの力をもった人が、そのことによって、自らの命を失ったのです。つまり生と死との矛盾です。釈尊は、生まれながらにして、生と死の厳粛な事実と直面されたこととなります。

これを一個人の場合に置き換えると、自分の生には必ず自分の死を伴います。生があるから、そのために死があるのが当然なのです。生と死は別々のことでは